

# 「崖から飛び降りる」つもりで 精一杯本気で動く そうして初めて新たな「発見」や 仲間に出会えるから

**小田** 本日はよろしくお願ひします。  
**夏木** こちらこそ、よろしくお願ひします。

**小田** 早速ですが、夏木さんは歌手、俳優、そして演出家と3つのカテゴリのお仕事をされていらっしやいますけど、それぞれにこだわりやテーマ、大切にしている思いなどはありますか？

**夏木** そうですね、アプローチはそれぞれみんな違うと思いますが、でき上がった作品だったり、ライブだったり、映画には結局すべて、「私自身が出てしまう」と思うんです。だから本気で素敵に生きていないと、つくり上げたもの自体に魅力がなくなってしまう。だからこの3つの仕事のそれぞれにある「クリエイション（創作）」的な部分には共通の思いがありますね。常に本気。よく「崖から飛び降りる気持ちで」なんていってますけど（笑）、これは自分自身の座右の銘というか、常に肝に命じてることなんです。だから3つを分けて考えたことはあまりないですね。

**小田** なるほど。すべてがつながって

いるというか一環したものでないですかね。他にも先ほどお名刺をいただきました「One of Love プロジェクト」(バラの購入を通じて途上国の子どもたちを支援する社会貢献活動。夏木マリ&斉藤ノブが中心となってスタートしたプロジェクト)」という活動も精力的にされてますが、これから何か新しいことを始めようと思つた場合、決断に向けた判断材料や基準などというものはございますか？

**夏木** 私の場合は明確な判断基準があるわけではなく、多くは出会ったたり縁的なもので始めてみるのですが、そこで1つの物事をやってみて「発見」があり、そこから派生したものが次へのアプローチになると考えてます。だから事前にこれをやろう、もしくはこれはやらないと決めたことはないですね。例えばワンオペラブプロジェクトの支援活動も始まりは出会いでした。そこから友人たちが助けてくれてプロジェクトとして動くようになってたんです。その動きのなかでお花と関わり合いができ、そこから今度は「日本のお花を使った花づくり」をしよう……とか、出会いがあつてそこからの流れに合わせて動いていくという感じになるんでしょうか。

**挫折や失敗も  
経験することで次に**

**小田** なるほど、まずはやってみるといふことが大事なのかもしれません。実際に行動して年齢とともにさまざまな経験を踏まえて人生を進めて来られたと思うのですが、私と同じ30代半ばのころは葛藤とか不安とかは



## 人生のテーマは常に本気



## SPECIAL INTERVIEW

夏木マリさんの生き方や人生観から見える強さを  
多くの起業家女性とその予備軍へ伝えたい

ゲスト

夏木マリさん

MARI NATSUKI

歌手・俳優・演出家と多くの面を持つ。また支援活動「One of Love プロジェクト」など多方面に活躍する起業家的な側面も併せ持っている。

聞き手

小田真貴子さん

MAKIKO ODA

企業コンサルティングやアウトソーシング事業を行う株式会社D商事代表取締役。東北大震災の復興支援の一環として映画「生きる街」配給にも携わる。

Text: 今野英昭 Photo: 佐藤元樹

ありましたか? と、いうのも今私の周りにも何かを始めようと考え「起業しよう」もしくは「起業してみたよ」って人たちが徐々に出てきているんですが、でもまだまだ「したいな」って思ってるだけで止まってしまってる人たちが圧倒的に多いんです。「やってみたいけどどうしていいかわからない」というのが主流で。ですから若いころからすごく活躍されていた夏木さんの当時の心境をお聞きしたいなと思ってます。

**夏木** 30代のころの私は演劇に夢中だった時期ですね。20代のときに歌で仕事を始めて、そこから活動がうなぎ下りになり(笑)、友人に誘われるままに演劇の世界へ入っていった



のがきっかけです。ただ、演劇の基礎があるわけでもなく、とにかくやりながら覚えていくという形でした。1年で舞台を4本くらい演って。でもそこまでやって初めて後の「印象派(※1)」につながり「これが私の本気になって取っ組み合える表現かもしれない」って気づくことができたのかもしれないね。そして「印象派」が今の私の基礎になったのです。大変でしたけど、やってよかったなあって思っています。すごく大変でしたけど、初めて本場の孤独も味わいましたし。

**小田** 孤独ですか。

**夏木** そう。1人でものをつくってる

と、世の中にこんなに孤独なことってあるんだなっていうくらい強い孤独を感じました。でもだからこそより強くなるとつながりたいて思うのかもしれないかもしれません。起業となると社会と直につながる組織に旗揚

る仕事をされるとこちらもお返ししたくなっちゃうでしょ? そしたらその2人にはそれ以降つながりが生まれますから……。そんな人がいいですね。

### 現地の女性たちの強さが役に力を与えてくれました

**小田** 続いて、映画『生きる街』の話なのですが、震災から6年、当初から被災地での活動をしていた夏木さんでしたが、そのきっかけとはどのようなものだったのですか?

**夏木** 最初は本当に気持ちだけです。行って自分に何ができるのか。音楽でみなさまの気持ちをほぐすだけ、でもそこで少しでも笑顔が生まれたら……。という気持ち。もともと支援という考えは私のなかで希薄でした。気恥ずかしさもあったので。ですから過去にあったさうじいお誘いは、すべてお断りさせていただいたんです。ただ、One of Love プロジェクトという自分発信の活動を続けていくうちに支援に対する思いが少しずつ変わってきたのかもしれない。支援する側としてどこか上から目線というか、「なんとかしてあ

げするわけですからエンターテインメントでつながる私たちより厳しい世界なのかもしれないですよ。始まりは自分1人だと思っし、きつと孤独や不安は感じると思いますが、でも、それもきつとその人の「任(※2)」があれば続けることができるはず。そして続けていければ先はあると思います。



敗だったとしても整理して次へつなげることはできますから。

**小田** そうですね。では、見方を変えて夏木さん自身にとって「追い求める理想の女性像」っておありになりますか?

**夏木** そうですね。仕事もバリバリして現役感もあるんだけど、そこに「愛」がある人がいいですね。こういう人に人は惹かれるというか、集まってくると思うんです。先ほどお話しした「成功」にも必要な要素だと思います。やることはしっかりやっていますのはわかるんだけど、そこに愛がない人というのはどうしても周りに「応援したいな」と思う人が集まらないんですよね。逆に愛のあ

### 成功。そしてその先に見る理想像

**小田** 「成功」というのも人それぞれ捉え方が違うと思いますが、夏木さんにとって「成功」とはなんだと思いますか?

**夏木** 行動することだと思います。外から見ていたり、考えていてもわからないから。とにかく失敗してもやってみる。行動して経験として捉えることができれば、その行動が失

いいな」と思うことがあればお願いいたします。

**夏木** この映画に限らず映画は本来監督のものであって一俳優が伝えたメッセージというのは私の場合特にないんです。というのも映画は10人が見れば10人が受ける感想、衝撃は変わると思うんです。もちろん映画のテーマとして「家族愛」や「この震災を忘れないために」ということはありますが、実際に観てもらってみんな「ここはこう思った」「私はこのシーンが好き」って話し合ってもらえたらうれしいです。現地の人がこの映画を見てどう思うのかは私も気になるところです。

**小田** 完成が楽しみです。

※1:夏木マリさんが自ら演出する作品シリーズ。ソロワーク8作では、国内だけでなくロンドン、パリ、デュッセルドルフなど海外公演も多数。その後自身が主催するカンパニー(Mark Natsuki Teron)を設立し、カンパニーワークとして「印象派(印)」シリーズをつくり続けて、今年パリ・ルーヴル美術館でも成功を収めた。

※2:自分の目標の願望に使命感が加わり、より濃く追求していくものに変わること。

2018年春公開予定

## 劇場映画 『生きる街』

夏木マリ  
10年ぶりの主演作

監督:榊英雄

世界中の人々に刻み込まれた東北の震災地区にある小さな漁師町でひとりの女性、千恵子(夏木マリ)が生きている。夫の帰りはあの日からない。娘と息子は故郷を離れ、自らの人生に足踏みをしている。そんな家族の前にひとりの韓国青年(イ・ジョンヒョン)が現れる。彼が手にするものは、千恵子とその家族が失った大切な記憶だった……。日常にある『生きる』を紡いだ感動のヒューマンドラマ。

